

(1)

ホテル・ツルケンの歴史

ツルケンの歴史が非常に興味深く、又当時を理解するうえで非常に手助けになるのは、その歴史の記述が、1933年から1944年にかけての危機的な時代におけるオーバーザルツベルクの変遷についての報告の最初に立ち現れてくるからです。

ヤコプスピシュルの世襲封土は、ザルツブルグ僧堂参事会に所属する他の全ての封土と同じように1683年頃建設されました。

当時、宿舍の住居者は領主のために戦時下のトルコに行かねばなりませんでしたが、帰還後彼らはただ“トルコ人”とのみ呼ばれ、それ以来宿舍は“トルコ小屋”となりました。

18世紀中にこの封土はザルツブルグ僧堂参事会の支配を離れ、住居者のものとなりました。今日まで古い封土の住人たちは、土地の人たちの間で彼らが居住していたツルケンという封土の名前で知られています。

石と木材に囲まれた建物は、当時のベルヒテスガーデン地方のバイエルン封土の典型的な様式でした。

カール・シュスター以前の“トルコ小屋”所有者は次の人々でした。

1891年5月18日から1902年3月8日まで

コッペンライトナー・フランツとアンナ

1902年3月8日から1911年9月27日まで

フォン・リークニッツ・ヴィクトル（歩兵師団の将軍でベルリン第3軍団司令官）

1911年9月27日に、カール・シュスターと彼の妻は“ツルケン小屋”をヤコプスピシュルから8000金マルクで買いました。当時としてはかなりの金額でしたが、シュスター一家は更に多くの金を投資し、“ツルケン小屋”をガストホフ（旅館）に拡大し、仕上げました。彼は旧トルコ小屋を、アドルフ・ヒトラーが後にハウス・ヴァッヘンフェルトでやったようにひとつの小屋にまとめました。その後1950年から1958年にかけて再建築した後も、保存されていた初期の4つの客室用朝食部屋は小さい客用居間として使用され今日まで存続していますし、旧旅館の時の客間も事務室として今尚保存されています。

カール・シュスターは多芸多才な男でした。山岳ガイド、消防隊員、村会議員、画家、木彫家であり、ツイターも弾けました。その上で、名の知れた“トルコ旅館”の亭主にも難なく納まりました。彼の妻は、ハライン（ザルツブルグ南約7キロの町）近郊オーバーアルムのヴァインケルホーフ城カバスの出身で、夫を良く助けました。彼女は腕の立つ料理人でしたが、それはわがままな顧客をうまくもてなす旅館であるための前提条件でした。

1911年、本館に7万マルク、炊事場に14000マルク、家具調度に25000マルクをかけて古い家は完全に改築、拡大されたのでした。

客室には、ベルヒテスガーデンの監督教区長候爵の名前と紋章の入った装飾壁画という

(2)

価値あるオリジナルの手作りの調度が保存されました・

やはりホテルの客の一人であったミュンヘン芸術アカデミーの教授のお陰で、カール・シュスターは旅館の名前にふさわしい家屋看板を仕立てる事が出来ました。それは今も尚ホテル正面にオリジナルな形で見える事が出来ます。ミナレット（回教寺院尖塔）で飾られた都市をバックにしてトルコの貴族が馬に乗って立っています。

更に多くの愛情と費用をつぎ込んだお陰で、新しいホテル・ツルケンは今もなくオーバー・ザルツベルグの愛好されるサロンとなりました。

カール・シュスターは、最高級のお客に対してもごく自然に自信あるやり方で対応しました。

ある日、ルイト・ボルト・バイエルン摂政の宮が従僕と共に再度来られた時の事です。しばらくして従僕が主人に警告しました。

「大公殿下、お時間です。我々はお発しなければなりません」すると、ホテル・ツルケンの主人が微笑みながら言いました。

「誰も私に指図できません。私がお発しなければならない時間を」（訳注；つまり、自分は誰の支配、指図も受けない自主独立の身分であることを言いつつ大公殿下をからかったのでしょう）

その他ホテルの常連客の中には、クララ・シューマン、ヨハネス・ブラームス、ペータ・ロセッカー、リハルト・ホス、プロイセン王国のチェーリー皇太子妃、およびヴィルヘルム皇太子などの名前が見えます。

1912年、ホテル・ツルケンは次の建物から成り立っていました。

構内；本館；客用キャバレー1室、大食堂1室、控え室1室、地下室1室、炊事場1室
食堂1室、客室15室、高圧水道管室4室

別館；4頭の馬のための馬小屋1室、2頭のラバのための家畜小屋1室、小作人のための部屋1室、貯水場、氷室、地下室各1室

0.523ヘクタールの土地と、0.073ヘクタールの床面積の家屋との全体の見積もりは、ヨハン・ラスプとフランツ・ブランドナーの2人の専門家によって168000金マルクと算定されました。

1877年から1897年3月1日まで、ペンション・モーリッツの率直的な女主人であったマウリチア・マイエルスさんのお陰で、観光客はオーバーザルツベルクの暮らしになくはならぬ存在になりました。彼女の死後は、1919年まで姉妹のアントニーが引き継いだペンションでしたが、1933年3月5日、ボルマンに徴収されてプラッターホーフとなりました。そして、先に同じ予定納期で竣工していたホテル・ツルケンとハウス・ヴァッフエンフェルト同様に、ペンション・モーリッツも拡張されてプラッターホーフに統合されました。

ホテル・ツルケンの客の殆どは、避暑地としてドイツ帝国の大都市から来た人たちでしたが、イギリス、ロシア、アメリカ、オーストリア、ハンガリー（二重帝国）などからの外国人も沢山来ていました。

普通の人から、バイエルン皇族、ヨーロッパの貴族階級の親戚の人たちまで、皆さんホテル・ツルケンの亭主の所に立ち寄ってはワイン、ビール、その他の清涼飲料水などを飲みました。

第1次大戦前、戦中そして戦後、ホテル・ツルケンにやって来た一人の男、デイトリッヒ・エッカートが、ホテルの運命に間接的にかかわり、影響し、その歴史を形成することになります。

彼は情熱的で民族主義的な詩人で、過激な定期刊行物（雑誌）の出版者でした。彼の雑誌“良きドイツ”は出版物の確固たる一分野を形成しており、広い読者層を持っていましたが、彼は又、数年以内にドイツを支配する事になるあの男アドルフ・ヒトラーを見出した一人でもありました。

エッカートはヒトラーを見出したのみならず彼に多くのアイデアを与え、ミュンヘンの上流社会との不可欠な縁を結ばせ、その時のために威望ある有力者や資本家仲間の所に入りできるよう斡旋しました。

当時のドイツ労働党のスローガンの多く、例えば「ドイツは目覚める」等はエッカートによるものです。

ペンション・モーリッツの常連客だったエッカートは定期的にツルケンヴァルトにも立ち寄り、両方とも親しくつきあいました。

第1次世界大戦が終わり、ホテル・ツルケンはまだ服従の下耐え忍ぶことになりました。インフレーションとあらゆる食品の破滅的な物価上昇がツルケンにも押し寄せ爪跡を残しました。にも拘らずカール・シュスターは1920年、ツルケンを再度拡張しました。

新しい建物に、炊事場（腸詰め料理場）の整理と客室の装飾が加わりました。この年からの新しい不動産の評価額が198000マルクであると通知されました。堂々たる不動産です。

1923年に、オーバーザルツベルクでは、アドルフ・ヒトラーは“ヴォルフ”、デイトリッヒ・エッカートは“ドクター・ホフマン”という匿名をしばしば使いました。ここツルケンの美しい酒場エバー・ワインバーにおいても、ヒトラーは、初め不思議そうに見守り耳を傾けていた土地の者達や泊り客の一部に対して、ドイツの惨めさとドイツ労働党の目的について燃え上がるような熱狂的な演説を行い、程なくしてここでも信奉者を獲得しました。

ツルケンの亭主は懐疑的でした。そこでデイトリッヒ・エッカートは彼に熱狂的で粗野な言葉で一通の手紙を書きました。彼はシュスターに熱心に誘いをかけたのです。（訳注；…、この世界は主としてシュスターから成り立っており、それ故に君らは世界につい

(4)

手何も学ばず、何事も変わる事がないのだ、、、といった類の毒舌をもって)

「、、、君はもはや他の人々を信じるべきだ。情報に通じており、その知識については役立たせられる人達だと君が少なくとも感じ取れるような、そんな人々をね。それとも何かい？君は私にそういったものを感じないとでも言うのか？ヒトラーにも？」

この時期、ツルケンの訪問客は今や全ドイツのみならず、他のヨーロッパからもでした。主に学生、商人、そして裕福な市民たちでした。来客芳名録中のある記帳（悲劇的な公用徴収直前の）は全くのオリジナルな直筆でした。それによるとルイス・トレンカーの名前がありますが、彼は有名な登山家で俳優、そして多くの山岳映画と故郷映画の監督・シナリオ作家でした。1933年8月6日の記帳にはユーモラスなスケッチがあります。

程なくして1928年、カール・シュスターは、「上記の経過の故に、、、」と、あるブローカーに手紙を送って屋敷を全部売ろうとしました。しかし、それはうまくいきませんでした。

黄金の20年代の後、宿泊もベルヒテスガーデンにおける外国人旅行客の往来もすっかり下り坂となりました。そのことはオーバーザルツベルクの賑わいにも影響を与えずにはおきませんでした。にも拘らずホテル・ツルケンの亭主は断固として諦めませんでした。彼によって設立された山岳・民族衣装保存協会、ド・ケールストアナの維持を申し出た事は良かったのです。見事な自然が多くのことを忘れさせてくれました。

1930年にはホテル・ツルケンの近所の女性ラウバルさんがヴァッフエンフェルト家の周りに柵（囲い）を造りたいと申出ました。また、この柵は一部シュスター家の地所を通って造りたいとも申出ました。

当時、カール・シュスターはまだこれを阻止しましたが、アドルフ・ヒトラーが2ヶ月前に帝国宰相(ライヒス・カンツラー)になった途端多数の訪問客が激増した1933年6月、ついに壁が引かれました。

ラウバル夫人に寄せられた手紙と二人きりでの談話によると、カール・シュスターはこの処置に悩んだそうです。また、ザルツベルクの牧師も異議を申し立てましたが徒労に終わりました。煩わしい壁は残りました。この調停の後間もなく、マルチン・ボルマンは当時まだ下位の職についていましたが、カール・シュスターに屋敷を売るべきだと要望しました。ツルケンの亭主は頑固に拒否しました。そこでマルチン・ボルマンは典型的な悲喜劇を企みました。

カール・シュスター。彼は自由人として齒に衣を着せませんでした。彼の隣人アドルフ・ヒトラーの滞在ごとの喧騒に立腹しました。ある時、彼は発言しました。

「今や、人々はここかしこで黒(SS)と褐色(SA)しか見られず、刑務所にいるように感じており、それは(褐色)革命の前には存在しなかったものであって、このような状況の下ではフランスで暮らした方がましだ」等など。このような発言の後には暴力がやって来ました。

(5)

嘗て一度カール・シュスターは憤激した一人のSSマン（親衛隊員）に攻撃され虐待されたことがあります。マルチン・ボルマンは、これを機会にNSDAP（ナチス党）の地方支部と協力して州郡クラスに、ツルケンへのボイコットを組織しました。

市場全体と、とりわけオーバーザルツベルクへの道路上に、ボイコットの広告ビラが貼られました。紛れもない形式で、ツルケンに立ち入らぬよう警告されました。

この、不潔なキャンペーンの動機は次のような主張でした。

「カール・シュスターは彼の振る舞いによって新しいドイツに反対の態度を公にした」

当時の殆どの人が陥っていた一種の躁状態を前にして、これは従わずには済まされない全く厳しい告発でした。しかし、それだけで十分ではありませんでした。

1933年8月19日、カール・シュスターは保護拘束（命令3195）されました。その根拠として、勿論国家の利害というのが一番大きいのですが、また憤激した大衆から発せられる不当な干渉からシュスターを保護するためでもある、という事も述べられていました（訳注：詭弁）。

マルチン・ボルマンのこの新しい陰謀でカール・シュスターは4週間ダッハウ強制収用所に収監されました。

同じ日ツルケンの前にある武装兵監視所は、ツルケンの敷地一帯に関心をもたないよう、忘れるように強要しました。又、残っている客は部屋を空け渡して他の宿泊所に移らなければなりませんでした。

全ては大衆の宰相の家、ベルクホーフの数メートル上の場所で起きましたが、そこベルクホーフでは熱狂させられた大衆が総統を一目でも見て、握手、あるいは、まさかとは思いつながら自筆のサインでも得ようと、何時間も頑張って待ち尽くしていました。

脅迫に苦しみ、常に強者は正しいと認識し、長いものには巻かれろと観念して、カール・シュスターは遂に3週間後にはマルチン・ボルマンがデッチあげた売買契約にわずか10分間の猶予だけで同意してしまいました。

165000 ライヒスマルクでツルケンは所有者が代わりました。売買は1933年11月20日に、カール・シュスターとマルチン・ボルマンの間で成立しました。

同日、マルチン・ボルマンからカール・シュスターに一通の手紙が届きました。その手紙でボルマンが約束したことは、

「満足のいく売買合意の結果としてカール・シュスターに対するすべての行動を停止する」という事でしたが、それはまるで悪ふざけが止んだかのようなようでした。

実はそれに加えて、カール・シュスターは次の事を確認させられました。それは、

「シュスターは彼の土地付き家屋をライヒ宰相アドルフ・ヒトラーのために、ボルマンに自発的に売ったのだ」ということでした。

しかし尚、カール・シュスターへの約束事は処理されませんでした。彼は家族と共にベ

(6)

ルヒテスガーデン郡に移転せざるを得なかったし、また、キームゼー湖に面したトラウンシュタイン近くに古い建物付きの農場を買わされました。それを改築して客室付きのホテルを造りましたので、なおさら彼は執事なしで会計も担当しなければなりませんでした。

ナチス党は、協定したツルケンで購入価格から、借金を差し引いた後に残った 90000 ライヒマルクを差し押さえたので、カール・シュスターは莫大な財政上の困難に陥りました。

彼は再び 4 週間拘禁されました。色々な嫌がらせを体験した後、彼は生きる元気をなくし、1年後の 1934 年 9 月 10 日に 56 歳で亡くなりました。

それはさておき、オーバーザルトツベルクのツルケンに話を戻しましょう。

長い間計画されていたように、ゲストハウス・ツルケンはアドルフ・ヒトラーの保安用兵舎として設備されていました。その備品とハウスヴァッヒエンフェルトの真上の目立たない場所は、そのための理想的な必要条件を満たしていました。ハウスヴァッヒエンフェルトは、貧弱なスケールと少ない客室の故に安全保障のための兵駐屯が許されませんでした。ツルケンにはその頃、バイエルンとベルヒテスガーデン生まれの者が優先的に採用され、ヒトラーの執務室と寝室の警備員として配置されました。それに加えて、待機する歩哨とライヒス保安部隊によるヒトラーの個人的保安司令部にも配置されました。

アドルフ・ヒトラーの個人的保安のための責任者は、後に親衛隊旅団長でライヒス保安長官になったラッテンフーバーでした。第三帝国のすべての重要人物の個人的保安は、信用して彼に任せられました。当時のアドルフ・ヒトラーの警備はライヒス保安本部の総統親衛隊司令部によって実行されました。それはライヒス保安本部、制服あるいは平服の混合した刑事警察、アドルフ・ヒトラー親衛隊ボディガード部隊の兵士などから成り立っていました。

ツルケンの強制的閉鎖直後の 1933 年 7 月、警備の対象であるハウスヴァッヒエンフェルトのためアドルフ・ヒトラー親衛隊ボディガード部隊 (LAH) 員がやって来ました。彼らは 8 月末に、強制的に空っぽにされたツルケンに指定されて入りました。

兵員の総計 ; 1 名 指揮官 (士官) 主任突撃隊長 コラニ
1 名 副指揮官 (下士官)
11 名 部隊員

ツルケンは基本的には旅館として残っており、ただ客は兵隊と刑事警察官だけでした。ハウスヴァッヘンフェルトの拡張とベルクホーフ (1935 年以降) への改築によって監視本部の保安任務は更に大規模になりました。監視は強化され、ツルケンの部屋は新しい実態に適合されなければなりませんでした。何はともあれ、特にオーバーザルトツベルクにヒトラーがいる際の整備と強化された運営を確実にするためにツルケンは改装されなければならなかったのです。

1935 年 8 月 6 日に、ベルヒテスガーデン郡会事務局は、建築許可番号 146/35 の下に

(7)

次のような公文書命令を与えました。

「兵員室はより大きく設計されなければならない、建物はその地方の建て方に一致するように建築されなければならない」と。

立案し施工する建築棟梁は再びテゲルンゼー近くのグムンドから来たアロイス・デガーノで、マルチン・ボルマンが建築主として設計図を描きました。隣人は以下の通りでした。

コルネリア男爵夫人 ルクスレーベンから

シュミットライン一家

バルトハーザー ブラントナー

そして、アドルフ・ヒトラー、しかし彼は建築プランには署名しませんでした。

建築開始は1935年11月19日で、改築は1936年7月15日に終わりました。ツルケンはこの(第1回)改築後、次の部屋から成り立っていました。

地階 (日本流には1階)

ボウリング場

階段の間付きの踊り場

4 地下室と地下道

男性 46 人用洗濯場

シャワー室と更衣室

洗濯場、乾燥室、ハンガー室

ボイラー室、コークス室

I 階 [日本流には2階]

踊り場と玄関の間

守衛室と電話交換室

階段室

WC施設と浴室

共同寝室

台所、配膳室、食料貯蔵所、洗い流し場

台所用 2 室

保安本部司令部用 2 勤務室 (ラッテンフーバー用)

3 事務室、刑事警察用の部屋

食事室と通路

上階

踊り場と通路

吹き抜けの階段の間付き談話室

アドルフ・ヒトラーの警備員用居間と寝室

ヒトラー親衛隊ボディガード 8 警備員用寝室

トイレットと風呂

I 納戸、I 室

(8)

3 事務室

(8 兵員用の部屋は5～8人用に準備されていた)

装備は簡素に保たれていましたが、ただ一階角の張り出し部屋（ライヒス保安部長ラッテンフーバー用）だけはある種の優雅さを見せつけていました。郡会事務局の土木建築課は、何はさておき、上の階にある8人用の兵員室の設備を禁止しました。部屋の収容能力が8人用ではなくせいぜい5人用の空気量にしか相当しない事が計算で出されました。

当時、拘禁用の独房は予定されて建てられたものではありませんでした。

美しい木彫りの、ベルヒテスガーデン侯爵主席司祭の紋章がついた、いわゆるエーバーワイン部屋の壁飾りが保存されていました。

新しく作られた電話交換室は、更に関連付けられて通知されました。

接続先；ハウス・ヘーエル・ゲール（党勤務室かつライヒス指導者マルチン・ボルマンの執行部室）

ハウス・ゾンネンケプフル（プラッターホーフの上半分）

ハウス・ベヒシュタイン（客用家屋）

ハウス・ヴァッフエンフェルト

及び郵便局

ハウス・ヴァッフエンフェルトに取り付けられた警報装置の端末は同じくツルケンにある端末にも接続されました。

ツルケンはオーバーザルツベルクの中で、その外見は依然として純粹で美しい、魅力あふれるホテルでした。

ハウス・ヴァッフエンフェルトをベルクホーフに改築し、それに付帯して道路が閉鎖されたあと、総統領域（フェーラーグビート）の決定によって監視所が建てられ出入り口が新たに作られました。

更にもっともっと広がる建設ブーム、それはマルチン・ボルマンが解き放ったものですが、それは又保安力および任務などの拡張をもたらしました。これまでに制定された歩哨勤務分隊と刑事警察官に、限界を超えた任務を当然とする状況はもはやありませんでした。

そこで生じたのが新しい建築計画で、それは見張りとそれに関連した臨時雇いのための宿泊所（親衛隊兵舎、運転室、管理室）で、ツルケンの建物の上にあります。

ツルケンは1937年に新しく改築されました。その役割は今や専属のライヒス保安本部長官（ラッテンフーバー）と刑事警察長官（ヘーゲル）の宿舎になることでした。

これをきっかけに準備室としての家屋に、今も存続する出入り門がしつらえられましたし、内部の館は著しく拡張され、玉石舗装で形をすっかり整えられ、新館の狭い方の側にある建物には電話交換室が設置されました。

2度の改築の後で、地下階に拘留用の独房が拡大、設置され、1階は元のまま残されました。上の階にはラッテンフーバーのための部屋が整えられ、2階（日本流には3階）には家屋管理人イルリンガー夫婦の住居がありました。

開戦直後の1939年の秋、ツルケンに居た後既成の兵舎に駐屯していたアドルフ・ヒトラー親衛隊ボディガードは、退去してポーランド前線へ送られました。今度からは別のSS部隊からの選り抜きの男がオブジェクト（対象監視）モニターなどの役目をはたすことになりました。

ツルケンはその後もライヒ保安部の司令部で、刑事警察、特に個人護衛の刑事警察的な部局の主要な宿舎でした。

拘留独房は単に極めて稀な要求の場合だけ用いられました。大抵は飲酒して法を犯して来させられた国内外の労働者などを収容するためのものでした。独房を使用するために一部屋以上は全く不要で、単に広く散在するのみでした。知られた限り、独房にはたったの3人が監禁されただけで、しかも全くの短期間でした。

1945年5月まで、ツルケンには以下の司令部が入っていました。

アドルフ・ヒトラーの個人警備所管のためのライヒス保安部

最後の旅団司令官ラッテンフーバー

防衛、事情によっては警告を管轄する刑事警察

刑事部長ヘーグル

彼は1944年7月20日に起きたヒトラー暗殺未遂事件の後刑事警察による調査を指揮しましたが、フランス軍の進駐に際して自殺しました。

SS監視中隊

オーバーザルツベルクにある全体の護衛対象物（ベルクホーフ、ベヒスタイハウス、8個の見張り歩哨小屋）に対する担当。

ツルケンには保安部長と刑事警察部長、ベルクホーフの当直員や保安部の勤め人のための住まいや寝室がありました。

1945年4月25日は、ツルケンにとって運命の日でした。

爆撃はツルケンにも巨大な損害を引き起こし、今や痛ましい廃墟の部分だけが残っていました。

貴重な彫刻を施したレリーフ（浮き彫り）、絵画、美しい家具調度など、爆撃から免れた殆ど全ては容赦なく略奪されました。

2, 3日以内に、オーバーザルツベルクのベルヒテスガーデンホフに居住していたアメリ

カ軍は、出来るだけ早くツルケンの痛ましい残部を爆破する事を決定したというのがツルケンの状況でした。

1945年の終わりになった途端、カール・シュスターの娘の一人はまだ廃物利用できる土塀と屋根の完全な部分を、臨時の住居のために整えました。

大変な努力の末、2、3の乏しい臨時の屋内拡張工事は成功しました。丁度、全ドイツライヒの廃墟と市にある数百万のこのような個室が処理されたように。

娘のテレゼ・パルトナーは、ツルケンをすぐに再び所有し経営したいと願っていました。

それはしかし、当時の法律上の曖昧さの故に冒険的な試みでした。カール・シュスターの未亡人エルビン・カールシュターが手に入れようと努力した再弁償の処置(1948)などは、シュスターの家族の要求を切り詰めるために、全て所轄の官庁の立場で執り行われました。

西側占領国がかったのNSDAP(国家社会主義ドイツ労働者党;ナチス党)に所属していた党员へ民主教育する際に行った捏造のひとつに、いわゆる非ナチ化の動きがありますが、例えばいわゆる非ナチ化裁判所に公式的原告が出頭し、その前で、ひどい話ですが、あたかもカール・シュスターがナチス党员であったかのように手続き(処遇)が取られたのであります。それはまるで、嫌がらせによってツルケンの亭主が危険に晒された、あの当時の屈辱的な状況は正当なものだったと認めさせんがための、、、。

買入価格もまた、マルチン・ボルマンが提案し、支払っていたら話ですが(実際にはごく一部のみ支払われたに過ぎませんが)当時の適正な流通価格をはるかに越えるものだったといわんばかりでした。

この主張がきちんと審査されていれば、根拠薄弱な有罪論告は確実に無効になったでしょう。1922年の高い評価は350000金マルクという結果を生み、1945年には信頼に足る男によって生じた高い評価が1933年当時の350000金マルクの流通価格という結果になりました。

しかし、1945年以後続いた激動に富んだ時代において、合理的な議論が問われるはずはありません。

修理に関する交渉は長引きました。1948年10月の初めに、修理の立場にある原告の委任弁護士は次のことを指示しました。

過去においてすでに蒙った損害の他に、ツルケンの廃墟が略奪者と臭気に強烈に襲われている、ということ。

1948年11月12日に、ホテル・ベルヒテスガーダイナーホーフで、修理業務の交渉期限がきました。その際、ツルケンの当時の隣人が事件の目撃者とされました。

殆ど全て、地方自治体ザルツベルクの嘗ての司祭さえもが持っていた意見というのは、

カール・シュスターは、オーバーザルツベルクの当時の持ち主の明らかな権利主張のために、明白な根拠もなく正規の所有から追放され、期限までには取り戻せなかったと言う事でした。ただ、疑わしい資産についてだけは安全措置が講じられました。追って沙汰のあるまでは2つの監視哨が更なる略奪から旅館ツルケンを守りました。

1949年1月1日にはバイエルン州とシュスター夫人との間の正式の用益賃貸借契約は終わりました。用益賃貸借契約期間中は訴訟期間中の手続きが認められました。

1949年2月17日には修繕官庁はカール・シュスターの相続人の、ツルケンに対する要求を原則的に認めました。

提案された調停期限(1949年3月29日)の1週間前、恐らく期待していたツルケンを、相続人に弁償損失返却することからバイエルン州を救うための逃げ道を、役所のある官吏が最後の瞬間に見出しました。

マルチン・ボルマンが売買契約したのは個人用か、あるいはナチス党のためであったかが調査されました。疑問は残ったままで、多分今日まで解明されていません。ですから、全て売買契約においてはライヒスライター(帝国指導者)・マルチン・ボルマンという公式名が存続しています。彼が個人的にどこから購入を始めたか推測するにせよ、兎に角肩書きによって行っていました。カール・シュスターの相続人もまた差し当たり(通貨改革の年であった)36000マルクを、まずはツルケンの返却のために強く要求されました(訳注; 相続人に、返して欲しければ35000マルクを払えと要求した)

1949年6月の官公庁の査定によると、ツルケンはその間に60000マルクの値打ちがあるとされました。確かにそれは殆ど廃墟でしたが、再建は尚可能でした。テレーゼ・バルトナーによって提供された1945年以降の再建築作業は、官公庁側で33650マルクが顧慮されました。この素っ気無い数以上のものが、トラウンシュタインの州建築局からの手紙により明白になりました。その中には建築細部の詳しい明細書、通常の状態がどのようなものであったか、そしてどんな再利用が可能かが詳しく扱われていました。

1949年12月に、ようやくバイエルン州から最終の比較対照表が来ました。69000マルクでツルケンは再びカール・シュスターの娘に移りました。1945年から1947年までに再び復興したツルケンに対する経費が販売価格に上乗せされました。残りの22000マルクは抵当として土地台帳の一番上に登録されました。

今や最終的な、更新された建設が始まりました。台所と全ての部屋に新しく調達された家具調度が入れられました。レーンとテラスが1つずつ設備されました。今や疲れを知らないテレーゼ・バルトナーの建設作業の後、カール・シュスターのもう一人の娘と、その娘のイングリットも再びツルケンの高級料理の営業を行いました。

そうこうしているうち、再びオーバーザルルベルクへの観光客は増えてより活気に満ちて事業は発展しました。何千人もが第三帝国時代のベルク・ホーフのせめて廃墟でも見

たいと流れ込んできました。ベルク・ホーフへの凄いブームが始まりました。事実、沢山の人がツルケンを訪ねて案内を頼みました。

ついに今やツルケンを管理するパートナー夫人が得たものは、ツルケンの敷地内にある地下壕の営業許可を与えるというものでした。彼女はすでにそこにあった坑道に螺旋階段の形で通路を建設し、ツルケン家屋の裏側に小さな木造小屋を建てたので、人々はそれを通して、すでに開通されていた地下壕に到達できました。2番目の通路は旅館の内部にありました。この処置により、彼女はまた新聞紙上で激烈に非難されました。

しかし、1952年ベルク・ホーフの爆破とオーバーザルツベルクの殆どの廃墟の撤去は、それまでの観光客の流れの大部分を止めてしまいました。そのために今まで達成できなかったのは、オーバーザルツベルク地方の将来像に関して、バイエルン共和国の側と行政官庁とで意見が一致しなかった事でした。だから、パートナー夫人が所有地にある設備をこのようなやり方で、(自由に)利用できるようにする事だけが当を得ていたのです。とりわけツルケンの建物の下の地下壕は全システムの興味深い一部分です。

昔からのオーバーザルツベルク人は、すでに通貨改革後間もなく修理に取り掛かっていました。これに関して多くの会議がツルケンで開催されました。ツルケン次第に再び活気のあるハイキング基地となり、又皆さんお気に入りのオーバーザルツベルクのホテルになりました。

おいしい料理とあふれる魅力で以て、パートナー夫人と娘イングリットは間もなくツルケンを再びベルヒテスガーデン地方の著名な高級(美食)料理店にしました。

1971年にパートナー夫人は亡くなりました。彼女はツルケンで二人の娘に共同相続を勧めましたが、間もなく結婚したイングリットと彼女の夫のオットー・シャルフエンベルクに相続させました。

1956年アメリカ人と結婚した2番目の娘ロートラウト・ロビンスはこの時点以来アメリカに住んでいます。

イングリット・シャルフエンベルクは夫のオットー・シャルフエンベルクと共に事業を拡張し、現代のホテルの標準規格に刷新しました。早くも全て客室にはツルケン本来の持ち味を損なうことなく、バス・ルームとWCが備え付けられました。

勿論、不運な戦争と戦後の出来事は相続人にとって、またツルケンにとっても重苦しい負担です。

オーバーザルツベルクでは、いわゆるインフラストラクチャー(社会の基礎構造)が欠けている事により、ツルケンもまたオーバーザルツベルクでの美食高級料理事業の他の全ての事同様に、全くWettergottのお導きに頼る他はありません。

90年前にカール・シュスターが大変な楽天主義とエネルギー、それに専門知識で以て旅館ヤコプスビシユル世襲封土を買い取り、拡張工事をし、多方面に渉る事業をオーバーザ

ルツベルクでやったように、彼の孫娘とその夫も又美食料理と懐かしい雰囲気という魅力で、客に贅沢な思いをさせるべく、不屈の努力を重ねたのです。

1993年にオットー・シャルフエンベルクが亡くなりましたが、妻のイングリットは関節の重病にも拘らず2000年12月1日まで事業を続けました。それから経営は若い夫婦に貸し出されました。1年間に渉り誠実な借り手一家は、事業にそれ以前と同様の誠実さを保ち続けました。それによって、この旅館はその後もオーバーザルツベルクの象徴的な建物、

「ツルケン」

として続いています。

1995年5月1日付けの発効により、全オーバーザルツベルクは99年間、営業施工有限会社、すなわちバイエルン州立銀行の100%出資子会社によって、バイエルン州から地上権という方法で貸し出されることになりましたが、第三帝国の全ての廃墟を取り除く負担金履行義務も付帯しています。

以上のような歴史を経て、そうこしているうちに、ツルケンはこの山岳地帯で単に一番古い建物であるのみならず、この時代に長続きした唯一のものとなりました。

。